

昏黄の海

若草の淡き薫を嬉しみて輕き心に雨後の野をゆく。
朱に染める眞帆の光れば紺青の浪爪立てり黄昏の海。
日の落ちて眞帆の朱の色うすれゆくそのたまゆらぞ海は悲しき。
節毎に樺色の皮のこしつゝ水々しうも伸びし若竹。
若竹の薄月浴びて匂ふ哉水無月の夜の窓に向へば。

七夕

あたゝかき春の日あひて生々と日ことのひゆく幸多き草。
安かに芽をふく草の幸を思ひてぞよる野のみゆる窓。
風そゞく女竹のもとに妹の緋の袖ゆらく七夕の宵。
すゝらんたまひし北の友に

父母のすむ野したひて泣くならんほろくと散る鈴蘭の花。
はるくと海こえて來し花なれば旅の愁のほの見ゆるかな。

玉のくづしろかねのくづほろくと膝にこほれぬ鈴蘭の花。
初夏の野邊の白露花のつゆむすびしがことさけるすゝらん。

ちさき生命

わか草の踏み心地よき春の野を小鳥の如く飛ぶ嬉しさよ。
ほの青く芽を出したる若草の小さき生命のいとほしき哉。
さやくと朝風吹けばおほらかに海の上すへる白き帆の船。

逝ける友

この秋は肩揚げとるとちぎりにし君は早くもゆきていままさず。
さびしくも夏の夕ぐれ咲出づる花ににたりき君のすがたは。

わか葉

うらやましくれへかなしみもだえなごいふ事なげにひかれる若葉。
あまたなきわか春ひとつまたゆけばなみだながして空をあふぎぬ。
つやゝかに日にてりはえて若き葉のさゝめく中にわたれたるかな。